

蛇と記憶～過去は生きて働いている

蛇と結ばれる

ここ数年小学校の授業に通っている宮古島には、蛇にまつわる古くからの信仰や民俗が数多く残されている。典型的なものは、島に棲む大蛇が美しい青年になって村の娘のところに通うという話。やがて大蛇と娘の間に子が生まれ、その子ども達が島の人々の先祖となったというものだ。

同様の伝承は各地にあるようだ。有名な奈良県の三輪山はもとより、茨城県にもヌカヒメ伝説がある。また、蛇と人との繋がりや深さを感じさせるものが他にもある。関東から北海道まで数多く出土する縄文時代の土偶には、妊娠した女性を象りその頭部にとぐろを巻くマムシを載せているものが多い。もちろん、縄文土器の躍動する文様も蛇を連想させるのには十分だ。

蛇と人間の間に子どもが産まれるなんて。そんな馬鹿げた話があるかと、現代人には到底受け入れ難いだろうが。そこには、古代の人々が蛇に託さずには置けなかった切実な想いがあったのではないか。

動く線の衝撃

蛇を初めて目にした時の衝撃を思い出してほしい。身体を動かすはずの手や足の無い縄のようなものが、突然動く線に変わり、素早く地を這う姿を目にした瞬間、突如露わになる生々しい感覚を思い出さないだろうか。

怖れや驚き。突き動かされたような衝動。古代の人々は、そこに、この世界を動かし生み出す根源的な力を感じたのではないか。

古代の人々は自然の中に潜在する根源的な力を日々感じつつ、自分たちもその力に支えられ生きていることを確信していたに違いない。そして、子孫への大切な伝承を、いつまでも生きて働く過去にするために、その根源的な力に託そうとしたのではないか。そう考えようになったら、私の中で、とぐろを巻く蛇の姿が、渦を巻く時間のイメージと重なっていった。

こうして蛇は、遠い祖先と土地との結び付きを伝える記憶の乗り物になったのではないかというのが、私の仮説だ。先祖達の想いは、根源的な力をあらかず蛇と自分達が一体化することで、自らが生きて働く過去となって、子孫達と共に永遠に暮らし続けることにあったのではないか。そのために、蛇は時間の直線化から常に逸脱し、過去が過ぎ去ることを拒み続けて来たのだろう。

衝動と共に生きる過去

蛇の例はわたしの勝手な仮説だが、記憶はひとの中に日々生じる感覚と共に、様々な過去を浮上させながら生きていくのではないか。だから、ひとが何かを感じるたびに、過去はそこで蘇り生きて働くことができるのだ。過去は真っ直ぐな時間軸の上を、ただ過ぎ去るものではない。記憶とは、流動化した時間の渦の中に混沌としつつも常にある霧や靄のようなものではないか。

記憶は、感じながら生きている私たちの心や身体から引き離すことができない。過去は、私達が他人や自然へと自分を開き、新鮮な感覚を得るときに、いつも無意識の中に浮上して生きて働いている。過去は、過ぎ去ったかつての今ではない。いつも今の中で、生きて働いているのだ。

記録に置き換えることで失われる何か

ひるがえって、現代を生きる我々にとって、記憶とはどのようなものだろうか。通常ひとの記憶は頼りない信用できないもの、曖昧なものの代名詞のように扱われている。記憶は、主観的で科学的ではないものとして。

現代人が記憶を忘却し、記録への依存を強めていることは間違いない。コンピュータの普及は、記録（データ）への依存を決定づけた。記録の巨大な集積は新たな技術やシステムを生み出し、世界を一変させた。日々変化していく社会を見ると、社会の実体が、記録の集積体という仮想空間に置き換えられつつあるのではないかという不安が、ふと脳裏をよぎる。

本当に、このまま流れに身を任せ、日々もたらされる技術革新を享受し続けていけば良いのだろうか。私たちは、今一度、記憶と記録の分岐点へと立ち帰り、よく考えてみるべきではないか。

記憶と記録は同じではないはずだ。記憶を記録に置き換えることはできない、置き換えることで失われてしまう何かがある。私の中で、その何かが蛇へのオマージュと重なっていく。

過去を標本化する

記録とは、私達の心や身体から過去を分離して、別の場所にデータとして保管する方法だ。そして、過去は直線化された時間軸に順序よく並べられていく。生に限りがあり、日々動き変化する人が記憶する過去よりも、規格化された装置の中にデータとして保存された過去の方が、正確で確実だとする信念が、そこにはある。

そのようにして、過去は分類され蓄えられていくが、記録はいわば、標本化された過去である。標本は、生きて動いて変化してはいけない。動かないことにこそ、標本としての価値がある。過去は専門家によって分類され、所定の位置にピンで刺され、固定され整理される。もちろん、記録の必要は無いとは言わないが、それらの過去はもう人々と共に生きてはいない。

しかし、突然の出来事によって、私達は記録に依存した社会の危機を体験することになった。多くの人々が大地の激しい揺れや海の異変を心と身体で感じたのにも関わらず、自分の中で浮上した感覚ではなく公式の記録や専門家やマスコミによる情報を信じて行動した。そして専門家による「想定外」の状況の中で多くの命が失われていった。さらに、一切の記憶を排除した記録の神殿が爆発し、土地の記憶が数値（ベクレルやシーベルト）で被われ、人々が記録の奴隷にされてしまった。

悲惨な教訓を得て、私達は記憶の大切さに漸く気付きはじめたようだ。防災とは、ひとりひとりがその場で感じ動くことができる心と身体を取り戻すことであり、そのために過去を働かせることができる記憶の力を取り戻すことだと。記憶を記録に置き換えてはならないのだ。

いま津波被災地では防災強化や国土強靱化といって、今回の津波の高さ（記録）に基づく巨大な壁（防潮堤）が造られようとしている。「記録が生んだ壁」によって海と街と人々が隔てられ、海との対話や記憶の力が永久に失われるのだろうか。記憶の力

を失えば、いつかまた同じ悲劇は繰り返されるのではないか。

復興とは、人々がその土地で生きる力を取り戻すこと。そして、そのために土地の記憶を、つまり、生きて働く過去を取り戻すことだ。人々がその土地で生きる意味は、生きて働く無数の過去によって支えられているのだから。過去は戻るためにあるのではない、今を豊かに生きるためにこそ在るのだ。私たちに必要なのは、振り返るための過去ではない。今ここに浮上して（現れて）来る過去だ。

記憶の海を見た。私はそれを、津波で壊滅的な被害を受けた南三陸町の小学校で見た。被災後に生徒達が描いたという未来の街の絵には、海と街を隔てる壁も境界線も無く、逆に海と街がひとつに溶け合うように描かれていた。きっと子ども達は、海と対話する街の復興を夢見ているのだ。記憶の持続には、自然との絶え間無い対話が必要だということを、子ども達は直感しているのだろう。

その絵を描いた子ども達と一緒に学習していた時、私には子ども達の背後にある窓いっぱいの海が見えていた。その海は、子ども達の豊かな感性によって、無数の過去が浮上しながら生きて働く、記憶が波打つ広大な海であり続けてほしい。

津波の記憶は蛇のように動く線となって、人々の中でいつまでも生きて働きかけることができるのだろうか。記憶が生かされる社会のあり方や人の生き方が、いま問われている。

2013年1月1日